

# メディア都市の復興

## ～広島の〈平和都市〉化を主題とする歴史社会学的研究～

大学院生の部



仙 波 希 望

東京外国語大学大学院  
総合研究科  
博士後期課程

### 1. 本研究の課題と対象

本研究は、広島戦後復興を「メディア都市」としての〈平和都市〉復興として捉え、その起源を明らかにすることを試みるものである。一般的に広島は1945年8月6日、つまり原爆投下を機に〈平和都市〉になったと考えられる。しかし周知のとおり、同日の広島は焦土であり、「平和」とは懸け離れた様相をしていた。その日の広島の街路は、決して〈平和都市〉を体現してはいない。であるとすれば、いかに広島が〈平和都市〉を果たしたかは必ずしも自明なものではない。本研究は、この展開プロセスを、近現代を貫く都市化のなかで醸成されたものであることを明らかにしようとするものである。

もし広島における「メディア都市」としての都市的再形成がすなわち戦後復興であるとするならば、むしろその都市化の水脈を辿り直すところに、〈平和都市〉という都市理念創出の存立基盤の痕跡を見出すことができるのではないかと本研究は考える。換言すれば本研究は、1945年8月6日をまたいだ歴史的パースペクティブをもって、〈平和都市〉化のダイナミズムを解明しようとするものである。これが本研究の課題であり、またそれを研究遂行上の仮説―戦前戦後を跨いだ〈平和都市〉化の存立構造を探求する―として位置づける。具体的には、1929年の昭和産業博覧会、1932年の時局博覧会、1935年の広島都市美運動の前後の出来事を主な検討対象に設定し、のちの都市復興を

準備することになる「メディア都市」としての都市化のダイナミズムを提示したい。

さて、ここで「メディア都市」について簡潔に定義づけておきたい。これは、カナダの都市研究者であるRob Shieldsの議論をもとに設定された概念である。Shields(1991)は自身の都市・空間研究の軸に、「場所の神話」を据えてきた。「場所の神話」とは都市イメージの総体であり、客観的対象としての空間性以上のものを形づくるものとして定義される。

そもそも、たしかに「場所とそのイメージは科学的な『対象』[...]ではない」。都市の「景観とは、ある統合された道具的行動によって生み出されるものではない。そうではなく、ある場所や地域に堆積した様々な歴史的活用や計画を反映する」ものである(Shields, 1991:18-24)。いわば、様々な広報・宣伝施策や実践的行動をとって生み出される都市イメージ(それは絵葉書であり、広告であり、歌詞や小説のなかに、である。(Shields, 1991:47))をShieldsは「場所の神話」と位置づけ、都市空間とこの「場所の神話」の相互作用のなかに都市空間形成プロセスを見出した。本研究は、このプロセスによって産出される都市空間ならびにその相互作用自体を「メディア都市」として捉え、その認識的枠組みとして提示する。「メディア都市」という視点は、単なる地図や都市景観を、人々の憧憬や思念、つまり都市理念との相互の連関から生み出されるものとして認識し、そのダイナミズム自体を検討するための概念装置として提示されるものである。

## 2. 分析(1) : 大広島と昭和産業博覧会

1927年に広島商業会議所から刊行された『大広島の建設』は、都市間競争に参入するべく提示された、都市政策提言のためのテキストである。そこで掲げられたスローガンこそが「大広島」に他ならない。その背景にあるのが「遅れ」の意識である。第一次世界大戦以降加熱する都市間競争において「遅れ」をとっているという認識から、他都市に比類すべきものとしてさらなる発展策としての「大広島」という称号が掲げられた。

ではこの「大広島」とは一体何を示すのであろうか。それは「都市—農村の格差は正=構造的なアーバンゼーションの希求」および「都市人口の停滞=性質としてのアーバンゼーションの希求」を背景に、提起された都市構想であると位置づけられる。つまり、その具体的な要素としては「都市計画の再検討、特

別市制実施への要望、商工業の振興、港湾・河川の拡充、工業動力のコストダウン、交通機関の整備、各種官公街や教育機関の誘致、町村の吸収合併」などがあげられるが(広島商工会議所, 1992)、包括的な都市開発プランのようでありながら、その狙いは基本的には都市区域の拡大とインフラ面の拡充という2点に集約される。1929年4月に刊行された『広島商工会議所月報』では、「大広島」の形態的な実現を祝い、その実質的な内容を拡充させるための契機として、昭和博の存在を掲げる(『広島商業会議所月報 1929年9月号』95:2-3)。市域の拡大としてかたちとして現れたこの「大広島」における新たな都市市民の創出機会は、1929年の昭和博の実現に仮託されていた。

昭和産業博覧会は、1929年(昭和4年)の3月20日から5月15日まで、会期55日間にわたり、大々的に開催された。第一会場を西練兵場に置き、第二会場を比治山公園、第三会場を元宇品としていた。第二会場・第三会場はそれぞれ、陸軍(第五師団)と海軍(呉鎮守府)が担い、双方が独特のパビリオンを設置することとなる。55日の会期には延数で180万人ほどの観客が来場した。この数字は1915年の広島県物産共進会(約80万人)、1958年の広島復興博(約90万人)と比べても圧倒的である。第一会場である西練兵場には会期中左右2ヶ所に14の出入り口が設定され、紙屋町停留場から降車した多くの観衆がこの昭和博に詰めかけた。

昭和博のパビリオンならびに展示物の特徴は、二つの側面—「内なる開発思考」と「外への開発思考」—に集約される。前者の「内なる開発思考」、つまり最新のものとされる近代テクノロジーを駆使しながら、あるべき都市の姿やそれを実現するための産業技術を、いま・ここにあるものとして提示しようとする志向性は、機械仕掛けの人造人間である「学天即」、理想の農業都市像を実際に作り上げた「農村地域」、近代テクノロジーと郷土の融合を試みた「郷土館」のアトラクションに顕著であった。後者の「外への開発思考」、すなわち帝國的拡張の軌と一にしながら大衆の欲望を詰め込んだ「見世物」としての色彩が色濃く反映されたのは、特設館街である。特設館街では満蒙参考館、朝鮮館、台湾館などがおかれ、「めくるめく祝祭気分のなかに曖昧に溶解し、人々を帝国の富がもたらす楽しみでいっぱい消費のユートピア」としての帝国主義的スペクタクルが創出されていた(吉見, [1992]2010:210)。

以上のような最新の近代テクノロジーや都市的な産業技術の提示をいま・ここへ投影していこうとする特質(内なる開発思考)と、この帝国主義的スペクタ

クルの創出(外への開発思考)は、身体から世界にいたる多層なスケールによって展開されていた。昭和博というメディアイベント、ハレの場としての都市空間に集約されたかたちで、超国家的な欲望(特設館街)から、日常生活と身体的振る舞いの理想郷(農村地域)にいたるまで、様々なスケールを通して、新たなユートピアの姿が描き出される。そしてこうした欲望はまさに都市そのものの、文字通り新たなる広島「日の出」として提示されたのである。ここに本研究が昭和博に着目する最大の理由がある。

付言すれば、この昭和産業博覧会の「企画」を担ったのが若き日の小野勝であった点も重要である。というのも小野は、1947年の第一回平和祭の「総合企画」をつとめた人物に他ならないからである。第一回平和祭は現在にまでつづく平和宣言が初めておこなわれた機会であり、また、それは当時のNHK広島中央放送局長の発案でもあった。さらに第一回平和祭は、戦後日本で最初に国際実況中継される機会でもある。いわば、広島における「メディア都市」としての重要な機会がこの第一回平和祭であったのだ。この起源—「日の出」—が1929年の昭和産業博覧会に求められるのである。そして、この成功をもとにわずか数年の後に開催され、再び小野が企画を務めたのが、戦時プロパガンダ型メディアイベントである1932年の時局博覧会である。

### 3. 分析(2) : 時局博覧会

1932年の時局博覧会がいかなる経緯を経て構想されたかは現時点で完全には明らかになっていない。だが、陸軍第五師団司令部が広島市・県の関係者を呼び寄せ、その開催について提案したのは、1932年1月のことである。「師団側では早くからこの計画を進めていた模様で、開催決定の段階では既に軍関係の出品、展示品とその輸送、搬入の概要は決定して」いたという(小野, 1978:5)。各館の建築資材の大部分は軍用のものを使用し、建築設備の経費は極めて僅少であった。その会期は1932年の4月19日から5月15日と、比較的短く設定された。先述のとおり小野勝が企画業務を担うこととなる。

西練兵場一帯が時局博覧会の主会場に選ばれる。西練兵場東端には新装された偕行社があり、そこが勅諭記念館とされた。第一・第二時局館が西練兵場の正門すぐ建てられ、西側に第一陸海軍館、広島城側に飛行機館、第二・第三陸海軍館が配置された。後述の通り時局博覧会最大の呼び物のひとつとなった「三笠のmast」や中国新聞社主催の映画館、演芸館が東側におかれた。そして広島県

立商品陳列所が満蒙館として、本通りにあった元広島ホテルが愛国館として、さまざまな展示が行われることとなる(小野, 1978:5-6)。

1932年の時局博も昭和博と同様、「内なる開発思考」と「外への開発思考」を有した、「時局」を反映しながらもトポロジカルな欲望を提示したメディアイベントであった。この時局博の上演形態の特質を提示すれば、第一に、昭和博よりつづく最新鋭の観覧、つまり未来を先取りさせる近代テクノロジーの「時局」的表現であり、第二に、「実演」性への固執、つまり実際にこの場所の現前を戦地とする、という意志である。前者に関しては、「不可視光線」の展示、実戦で用いられた最新鋭の兵器の陳列、満州事変・上海事変に関連する飛行機の実物の配置といったものに特徴的である。そして後者の特質としては、さながら「実戦」の様相を呈した太刀洗航空隊の偵察機1機、戦闘機4機によって展開された航空ページェントや、西練兵場の周囲のお堀で実施された、電気点火で実際に水雷を爆破させる「水雷」の実演などから読み取ることができる。

つまり時局博は、戦地の体験によって過剰に傍証される「軍事都市(軍都)」という都市理念を、いま・ここに再現させる企図をもったメディアイベントであった。近代都市への漠たる夢を多岐にわたるかたちで発露した昭和博と比較すれば、その指向性、つまりこれからの理想とする都市像をより純化したかたちで提示したものであったと考えられる。時局博はこの理想像を「戦地」にもとめ、希求される軍事都市・臨戦都市を、「航空ページェント」や野戦陣地の実物展示から再現することを試みた。昭和博と比較すれば、時局博が都市理念としての「軍事都市(軍都)」を志向しながら、最新鋭の観覧=近代「軍事」テクノロジーの発露(未来性) および実演性=実際にこの場所を戦地とすること(現前性)という二つの特徴を兼ね備えていたことを指摘できる。

この時局博は「市民的熱狂」をもって受けとめられた。開会初日に14,000人が来場し、1日平均22,000人の入場者を「呑吐」した(勅諭拝受五十年記念時局博覧会協賛会, 1932:126)。小野はこうした敷地面積の坪あたりの数字を概算で算出したうえで、「これを昭和四年開催の昭和産業博覧会の面積約五万坪、一日平均一万五千四百七十余人に比較するとまさに驚異的な数字といえる(小野, 1978:29)」と記している。こうした広島市民の「軍事都市(軍都)」への熱狂は、時局博に前後する二つの出来事からも指摘できる。ひとつは1931年12月21日の第五師団による天津臨時派遣軍の出征であり、もうひとつは1932年のリットン調査団の満州国侵略を認めた報告書に対する反対集会である。達成

すべき理想図としての「軍事都市(軍都)」が、広島という地で強く求められることとなる。

しかし、「大広島」構想で描かれた都市の夢は、「軍事都市(軍都)」理念にすんなりと置き換えられたのだろうか。実はそうした都市への欲望は、異なるコンテキストのなかで生きながらえていた。これが明瞭なかたちで再度現れるのは、1935年の広島都市美運動発足にまつわる一連の出来事である。

#### 4. 分析(3) : 「東洋のヴェニス」と広島都市美運動

本研究が最後に分析対象とするのは、1931年以降の日中戦争下から戦後に至る、上記の二つのメディアイベントとは異なる都市的なものを追求する水脈一広島都市美運動にまつわる一連の出来事一である。そもそも、戦後広島には、1945年12月に提示された楠瀬常猪県知事による〈平和都市〉の名の下の「瀬戸内海大観光地帯のセンターポイント」構想に示唆され、そして1948年11月の『広島原爆災害総合復興対策に関する請願書』で根拠とされた、「東洋のヴェニス」という都市イメージがある(仙波, 2018)。これを都市計画そして盛り場計画という文脈のうえで、広島においてはじめて言及したのが、戦後日本の都市復興・都市計画における最大のイデオログかつテクノクラートである石川栄耀である。「東洋のヴェニス」であることが広島の「観光都市」としての復興の根拠となり、1958年には根拠であった「観光都市」が理想へと転換されたうえで、〈平和都市〉が翻って広島における根拠となっていく。〈平和都市〉との時制を交換しながらも、「東洋のヴェニス」は戦後広島の都市空間形成に寄与していくのである。

石川栄耀は、1930年代から40年代にかけて、複数回広島を訪れている。その初回が1935年2月の講演会であり、最後が1946年5月28日、第12回広島復興審議会への参加である。前者は広島都市美運動の嚆矢となる講演となり、後者での発言も、のちの広島の復興プランに影響を与えるところとなる。そしてこの1935年の石川の来訪が引き金となり、広島都市美運動が開始されるのである。ここに「メディア都市」としての復興のもうひとつの起源を見出すことができる。

石川が広島で述べた「都市発展」施策のポイントは以下の三点である。前提として、人口増加および工業化というインフラ面での拡大発展を目指すこと、そのインフラをもとにした観光客を誘致するための都市美計画を策定すること、

そして「盛り場」を整備すること。ル・コルビュジェの都市計画思想を反復するような構想を伝えた石川の言葉は広島テクノクラート・パワーエリートに熱狂的に受け止められる。というのも「大広島」構想以降、彼らにとって悩みの種であった都市人口の停滞(性質としてのアーバンゼーションの希求)を指摘されたうえで、その計画構想を「美」「明るさ」によって表徴される「都市美」や「盛り場の一般計画」によって展開していく具体的な方途が提示されたからである。こうした美観構想や盛り場構想は、これまでの広島では顕現してこなかった論点であった。つまり広島におけるアーバンゼーションの系譜において、ここで初めて都市「美」景観意識が強く加わることとなる。

こうした「都市美」を表徴する都市イメージこそが、「東洋のヴェニス」である。石川はことあるごとに「ヴェニス」という都市像を提示し、都市美、盛り場計画、そして観光計画を通じ、それに邁進するよう広島のテクノクラート・パワーエリート層に訴えかけた。広島においてわずかなりとも芽生えていた「東洋のヴェニス」という都市理念を鋭敏に察知し、それを大々的に提示した人物こそが、石川であったのだ。「東洋のヴェニス」という一見変哲のない都市のイメージが重要なのは、これが戦前と戦後をまたぐかたちで展開され、〈平和都市〉化への根拠として位置づけられたからである。これが単なる推察でないのは、アクターの同一性という観点からも傍証できる。石川は戦前に複数回広島を訪れ、戦後も復興審議会に参加した。そして、1935年の講演、同年の「東京盛り場見学団」、および1946年の第12回復興審議会の石川以外のすべての参加者は、のちの「原爆市長」濱井信三ただ一人である。つまり、濱井を広島市側の主要アクターとしながら、この石川の都市に対する思想が延命したのである。

さらに濱井が石川から受け継いだ、ないしは共鳴した都市に対するイメージが、「広漠たる空地」である。区画整理を信条とする石川の目には、原爆体験をつうじた都市の完全なる破壊は、「広漠たる空地」すなわち Tabura Rasa として映った。その旨を石川は広島市の復興審議会ですべて。「無から再出発する都市改造」の可能性を濱井は石川から受け取ったうえで、のちに幾度も同様の表現を繰り返すことになるのである。破壊の跡を新たなる都市の建設予定地としてみなす先に置かれたのが、〈平和都市〉である。1920年代における「大広島」構想以降の都市的課題―「都市―農村の格差是正=構造的なアーバンゼーションの希求」「都市人口の停滞=性質としてのアーバンゼーションの希求」―をもとに、その遅れを見出し、トポロジカルな充填を図っていく近代都市=メデ

メディア都市のダイナミズムは、こうした水脈のもと、原爆体験を超克しながらも延命を果たし、〈平和都市〉としての復興プロセスへと接続されることとなる。

## 5. 結論

本研究は、〈平和都市〉それ自体の起点を原爆体験に求めず、「メディア都市」という上位概念の設定により、より歴史的なパースペクティブを拡大したうえでその系譜のありかを明らかにした。これはたとえば旧来の研究にある原爆から平和へ、といった認識、もしくは軍都から〈平和都市〉へといった視点からの変革を迫る寄与となる。アクターの同一性、構造的同質性など、多くの点から、「メディア都市」広島の〈平和都市〉化への水脈が戦前に準備されたことを本研究は提示することができた。様々な都市理念、都市イメージそれ自体を所与のものとするのではなく、それがいかなる存立構造のもと生み出されるのかを探求することで、「メディア都市」という〈平和都市〉を生み出す空間的なる磁場の生成過程を見出すことが可能となった。

このような視座は、様々な領域で進展する「復興」研究にも寄与するものである。複合的な被災地研究が進展するなかで、厄災の「後」のみに注視するのではなく、それがどのような空間的ないしはメディアの介在した方法をもって展開されているかを、より広い射程から逆照射する試みこそが、そこで暮らす人々やその地の「復興」の様相を認識する術として機能する。本研究のこうした寄与は、さらに普遍的な都市研究・メディア研究との接合面を探るという課題とも表裏をなすものである。

### 要旨内での引用文献一覧

勅諭拝受五十年記念時局博覧会, 1932, 『勅諭拝受五十年記念時局博覧会誌』勅諭拝受五十年記念時局博覧会.

広島商工会議所百年史編纂委員会, 1992, 『広島商工会議所百年史』広島商工会議所.

Shields, Rob, 1991, *Places on the Margin: Alternative Geographies of Modernity*, Routledge.

吉見俊哉, [1992]2010, 『博覧会の政治学——まなごしの近代』講談社.

小野勝, 1978, 『幻の「時局博」を掘る』自費出版.

仙波希望, 2018, 「〈平和都市〉空間の系譜学」東琢磨ほか編『忘却の記憶 広島』月曜社.